



乳幼児期の孫育て研究の動向～1994年から2018年に報告された文献レビュー～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2021-04-16 キーワード (Ja): 祖父母, 孫, 孫育て, 乳幼児期, 文献レビュー キーワード (En): grandparents, grandchildren, raising grandchildren, infancy, literature review 作成者: 秦, 暁子, 高橋, 香子, 坂本, 祐子, 和田, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000631

乳幼児期の孫育て研究の動向

～1994年から2018年に報告された文献レビュー～

Trends in research on raising infant grandchildren: A review of studies conducted from 1994 to 2018

秦 暁子¹, 高橋 香子¹, 坂本 祐子², 和田久美子³
Akiko HATA¹, Koko TAKAHASHI¹, Yuko SAKAMOTO², Kumiko WADA³

キーワード：祖父母, 孫, 孫育て, 乳幼児期, 文献レビュー

Keywords: grandparents, grandchildren, raising grandchildren, infancy, literature review

Abstract

This study aimed to both clarify trends in research on raising infant grandchildren through a literature review and to examine future issues. We searched Ichushi-Web from the Japan Medical Abstracts Society and CiNii Articles using keywords such as “raising grandchildren” and “grandparents”, and conducted a review of 24 cases in the literature that described raising infant grandchildren. For the target literature, the year of publication, title, research purpose, research design, research subjects, and results were listed, and the research trends were examined in 5-year increments. As a result of the literature review, research on raising infant grandchildren was classified into three themes: the contents of grandparents raising grandchildren, the impact of raising grandchildren on the health of grandparents, and support for grandparents raising grandchildren. In future research, it will be necessary to analyze the effects of the grandparents' age and lifestyle, and consider methods of support, because it became clear that grandparents of a wide range of ages are raising infant grandchildren.

要 旨

本研究は、乳幼児期の孫育てに関する研究の動向を文献レビューにより明らかにし、今後の課題を検討することを目的とした。

「孫育て」「祖父母」等をキーワードに、医学中央雑誌 Web (Ver. 5), CiNii を用いて検索し、乳幼児期の孫育てについて記述された24件を文献レビューの対象とした。対象文献について、発表年、タイトル、研究目的、研究対象者、結果を列举し、5年ごとに研究の動向を検討した。

文献レビューの結果、乳幼児期の孫育て研究は、祖父母が行う孫育ての内容、祖父母の健康への影響、祖父母を対象とした支援の3つに分類された。幅広い年齢の祖父母が乳幼児期の孫育てを行っている実態も明らかになったことから、今後は、祖父母の年齢別の分析やライフスタイルの影響を考慮した分析を行い、支援を検討することが必要ではないかと考えられた。

1 福島県立医科大学看護学部地域・公衆衛生看護学部門 Department of Community and Public Health Nursing, Fukushima Medical University School of Nursing

2 福島県立医科大学看護学部成人・老年看護学部門 Department of Adult and Gerontological Nursing, Fukushima Medical University School of Nursing

3 福島県立医科大学看護学部小児・精神看護学部門 Department of Child Health and Mental Health Nursing, Fukushima Medical University School of Nursing

I. はじめに

近年、女性の社会進出による共働き世帯の増加¹⁾や、子育ての社会資源が充足していないこと²⁾等を背景に、地域における子育て支援の一環として、子育てが推進されている。2014年に厚生労働省は、次世代育成支援対策推進法に基づく行動計画策定指針を定め、その中に子育てのための休暇制度の創設を盛り込んでいる³⁾。また、2015年に一億総活躍国民会議で「一億総活躍社会の実現に向けて緊急に実施すべき対策－成長と分配との好循環に向けて－」が取りまとめられ、「家族の支え合いにより子育てしやすい環境を整備するため三世帯同居・近居の環境を整備する」などの取り組みが行われてきた⁴⁾。自治体や医療機関においても、子育て推進のために、子育てハンドブックの交付や子育て教室が実施されている⁵⁾。

このように子育て推進のための様々な取り組みが実施されているが、特に乳幼児期の子育てへの期待は大きい。乳幼児期は、生活の全てを親や主たる養育者といった周囲の大人に依存しなければならない時期であるため⁶⁾、養育行為を多く必要とするからである。この乳幼児期の養育支援について、20～79歳の男女を対象とした内閣府の調査によれば、子どもが小学校に入学するまでの間、祖父母が育児や家事の手助けをすることが望ましいと約8割が回答している⁷⁾ことから、祖父母への期待の大きさがうかがえる。しかし、祖父母の側からみると、子育てをすることが無条件の喜びや生きがいにならないことが指摘されており⁸⁾、祖父母にとって良い影響ばかりではないことも示唆されている⁹⁾。

特に、乳幼児期の孫を持つ祖父母は50～60歳代が多く¹⁰⁾～¹²⁾、年代に応じた様々な役割獲得¹³⁾だけでなく、ボランティア活動や余暇活動への参加など¹⁴⁾、自分らしさを求めて活動している年代でもあるため、子育てが必ずしも祖父母の喜びや生きがいにならないという指摘は、50～60歳代

の祖父母自身の自己実現の困難さにつながると考えられる。子育ての推進のためには、担い手である祖父母の側からの検討も必要だが、まずは、乳幼児期の子育てに関するこれまでの研究を整理し、課題を検討する必要があると考えた。

II. 研究の目的

乳幼児期の子育てに関するこれまでの研究の動向を整理し、今後の課題について検討する。

III. 研究方法

文献検索のデータベースは、医学中央雑誌 Web (ver. 5) と CiNii を用いた。検索に際しては、キーワードを「孫」と「育児／子育て／子育て／子守り」と「祖父母／祖父／祖母／高齢者／三世帯」とした。会議録を除く和文献の中から、祖父母による乳幼児期の孫の世話に関する記述があるものを抽出することとした。

検索期間を指定せずに検索したところ、文献は計100件であった(2018年6月時点)。このうち、重複文献を除外し、祖父母による乳幼児期の孫の世話に関する記述がある24件^{15)～38)}の文献を分析対象とすることとした。

対象文献について、発表年、タイトル、研究目的、研究デザイン、研究対象者、結果(主な内容)を抽出し、5年ごとに研究の動向を分析した。

IV. 結 果

検索の結果、最初に文献が登場したのが1994年であったため、1994年からの文献を対象とした。対象文献の年次推移を5年ごとにみると、1994～1998年3件^{15)～17)}、1999～2003年2件^{18) 19)}、2004～2008年2件^{20) 21)}、2009～2013年7件^{22)～28)}、2014～2018年10件^{29)～38)}であった。2009年以降、増加の傾向を示していた。

表1. 乳幼児期の子育てに関する文献の概要

No.	タイトル 著者(発表年)	研究目的	研究 デザイン	研究対象者	結果(主な内容)
1994 ～ 1998 年の 文献	1 祖父母・孫関係に 関する研究－第3 報－「子育て」 にみる祖父母の位 置づけおよびその 主観的評価－ 杉井ら(1994)	「子育て」において、祖父母がどのような位置を占めているのか、いかなる援助を行っているのかを明らかにするとともに、それらを祖父母自身がいかにか主観的に受け止めているのかを実証的に検証する	横断研究	3歳児健康診断受診者の祖父母177名	■平均年齢は62.01歳(46～77歳)であり、50歳代31.5%、60歳代55.3%、70歳代11.3%であった ■祖父母が抱く「有用感」では、「祖母の喜び」と「孫がなつく」、「孫からの必要性」に有意差がみられ、「生活満足感」では、「孫がなつく」に有意差がみられた ■祖父母は、育児は母親を主体とし、父親や父方祖母・祖父が代替的に支え、そのまわりを母方祖母・祖父が補完的に支え、さらにそのまわりをその他の親族、友人、近所の人が支えると認識していた ■育児関与に関する認識では、祖父母ともに育児関与を「時々している」という項目が最も多く、特に祖母は、食事の世話や風呂、昔話や本の読み聞かせといった育児に祖父よりも多く関わっていた
	2 祖母の「子育て」 に関する研究－主 観的幸福感との関 連において－ 杉井ら(1996)	祖母の育児参加実態と育児意識を明らかにするとともに、それらがどのように主観的幸福感に影響を及ぼすのかを実証的に検証する	横断研究	3歳児健康診断受診者の母親121名(祖母と同居)および祖母111名(子ども夫婦・孫と同居)	■祖母の平均年齢は62.58歳(48～77歳)であり、50歳代30.3%、60歳代56.9%、70歳代11%であった ■母親が主体的に育児を行い、祖母は補佐的に育児に関与している、と祖母・母親双方が認知していた ■祖母は、育児は親がすべきもので口出しすべきではないという認識を母親よりも持っていた ■祖母自身がより多くの子育てを実際に行っていると認識しているほうが、主観的幸福感を高く有していた

	No.	タイトル 著者（発表年）	研究目的	研究 デザイン	研究対象者	結果（主な内容）
1994 ～ 1998 年の 文献	3	祖母の子育て参加の実態について（第1報）－子育て参加の内容－ 宮中ら（1996）	3歳の幼児と養育的関わりを持つ祖母の子育て参加の実態を明らかにする	横断研究	京都府内に居住し、3歳児の孫に対して何らかの養育的関わりをしている、同居または近隣に居住している祖母528名	■年齢は、40歳代1.1%、50歳代34.7%、60歳代51.7%、70歳代9.8%であった ■子育て参加の理由は、「母親支援型」40.5%、「対孫関係型」19.7%、両方を理由に挙げた「混合型」31.4%であった ■乳児期への子育て参加状況について、直接的子育てで最も多いのはおむつ交換82.9%、間接的子育てで最も多いのは育児の相談71.4%。社会・文化的子育てで最も多いのはあやす・抱く89.9%であった。幼児期における子育て参加状況について、直接的子育てで最も多いのは衣服の着替え70.4%、間接的子育てで最も多いのは育児の相談64.8%。社会・文化的子育てで最も多いのは一緒に遊ぶ92.8%であった ■約9割の祖母は子育て参加をしていて楽しいと感じ、約7割が心配や不安があると感じていた。心配や不安の内容として、「自分の身体の疲労」「自分が子育てをしていた時と子育ての仕方が異なり戸惑う」があった
	4	孫の出生にともなう祖父母の育児関与と健康づくり 波川ら（2000）	孫の出生との関連で、祖父母世代の生きがいづくりや、要介護状態の予防につながる保健行動を把握し、孫世代との異世代間交流による祖父母世代の健康づくりや、育児参加のあり方の基礎資料を得る	横断研究	同居・別居の2歳以下の孫がいる祖父33名および祖母43名の計76名	■平均年齢は、祖父59.5歳（48～70歳）、祖母56.6歳（47～71歳）であった ■食事、入浴、オムツ交換、遊びなど、育児へ関与している祖父は、55.3%であった ■祖母の保健行動について、以前より増加したと答えた人が70%を超えたものは、人生目標では「孫の成長の節目を楽しみにする」「孫の成長が見られるよう健康に注意する」、社会面では「離祭りなど子どもの歳時記への関心」「環境問題への関心」が出生後に増加していた。社会面の「友人知人に孫の話をする頻度」「子どもが巻き込まれる犯罪に注目」は、出生前・後共に増加していた
1999 ～ 2003 年の 文献	5	中高年女性（祖母）の子育て参加と心理的健康との関連について－心の健康にプラスとなる孫との関わり方－ 宮中（2001）	中高年女性（祖母）の子育て参加がどのように心理的健康に影響するかを分析し、特に心の健康にプラスに影響する孫との関わり方について考察する	横断研究	京都市および隣接する5保健所管内区における3～5歳児を持つ母親と同居または近隣に居住し孫と何らかの養育的関わりのある祖母528名	■年齢は、40歳代1.1%、50歳代34.7%、60歳代51.7%、70歳代9.8%であった ■祖母が生きがいと感じていることは、孫の世話71.8%、友人や隣人との交際66.7%、趣味や娯楽66.1%であった ■心理的健康にプラスに影響していた因子（SDSの抑鬱度を下げ、PGCモラルスケールの満足度を高めることに関与していた要因）は、「健康と感じている」「日常生活に自立している」「配偶者が健在である」「子育てに疲れを感じていない」「母親との育児方針の相違がない」「子どもの世話が好き」「遊びなどを中心とした社会・文化的な子育て参加が多い」などであった
	6	家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題 石井ら（2008）	生後1年未満の孫の育児に関わる祖父母を対象とした孫育児支援プログラムを実施し、その反応を通してプログラムを評価し、有用な孫育児支援のあり方を提示する	事例研究	生後1年未満の孫の育児に関わっており、孫育児支援プログラム全3回に参加した祖父2名	■年齢は、40代後半1名、60代後半1名であった ■孫育児支援プログラムの目的は、祖父母と両親が育児方針を共有し、協力・役割分担ができることにより、家族員の育児対処能力が向上し家族の関係性が良好になることであった ■事例Aは、専門家による情報提供や参加者同士の情報交換により、現代の育児方法に対する抵抗が軽減し取り入れていこうという気持ちが芽生える、両親の育児対処能力に気づき、両親の育児を見守りながら必要に応じて助言をするという自分の役割を選択するという変化がみられた ■事例Bは、自らの孫や母親との関わりを他の参加者に語り支持されることによって育児対処能力の自信が強められた
2004 ～ 2008 年の 文献	7	わが国における祖母の育児支援－祖母性と祖母力－ 久保ら（2008）	祖母性と祖母力について分析し、祖母自身の生涯発達における意味について、また祖母の育児支援のために専門家として支援することは何かについて明らかにする	質的記述的研究	孫を持つ女性10名	■年齢は56～72歳であった ■祖母性（女性が心理的・社会的に祖母になること）の特徴として、【癒し体験】【いきがい】【命のつながり】【浄化】【重荷】【家族の変化】【夫婦関係の好転】があった ■祖母力（育児支援の担い手としての祖母の力）の特徴として、孫の成長に合わせて育児全般において支援していた。孫の年齢でみると、0～1歳では、授乳、沐浴、おむつ交換、散歩、子守り、一時的な預かり、衣服の準備などであり、2～6歳の幼児期では、孫の遊び相手、家族の洗濯や食事のしたく、嫁の相談相手、経済的な支援をしていた
	8	子育て支援に向けた祖父母学級導入の検討 角川（2009）	岩手県における祖父母の育児支援の現状を明らかにし、育児のキーパーソンである祖父母の力を子育てに発揮できるようにするために、祖父母学級の導入について検討、考察する	横断研究	1歳6ヶ月の子どもをもつ母親149名	■仕事復帰後の母親の育児協力者は、実母21.3%、義母23.1%であった ■祖母の年齢は実母・義母ともに50～60歳代が約8割であり、約6割の祖母が何らかの形態で仕事に就いていた ■祖父母学級の参加について、52.4%の母親が祖父母の参加を希望していた。祖父母学級に希望する内容は、「祖父母の役割」についてが最も多かった
2009 ～ 2013 年の 文献	9	孫育てに関する祖父母の思い 笹田ら（2010）	祖父母の不安や困っていることなどについて、原因や内容を調査する	横断研究	6歳以下の孫を持つ祖父母34名	■平均年齢は62.4±7.29歳（48～78歳）であり、40歳代3%、50歳代29%、60歳代47%、70歳代21%であった ■孫や祖父母自身に関する不安や困りごとで「特に不安はない」と答えたのは15%であり、85%は何らかの不安を感じていた ■孫に関する不安や困りごとは、教育やしつけに関すること33%、発育や発達に関すること24%、哺乳、離乳食、食事などに関すること12%、睡眠や夜泣き・排泄などの日常生活に関すること12%、の順に多かった ■祖父母自身に関する不安や困りごとは、疲労を感じる36%、世代の違いによる育児観のギャップ21%、自分のやりたいたができなくなる、時間がなくなること21%、の順に多かった
	10	祖母性の因子構造 久保ら（2011）	祖母性の構成因子と特徴を明らかにし、祖母らによる育児支援活動の推進や、女性の生涯発達を支援するための示唆を得る	横断研究	東京都内、近郊に住み、地域のカルチャーセンターに通う方の中で、孫を持つ女性298名	■平均年齢は64.4±7.2歳（49～85歳）であり、60歳代が半数を占めていた ■祖母性（祖母になること）の構成因子は、「健康不安と自己実現の困難」「生命や家の継承と達成感」「孫から受けるケアギビング」「孫との支持的な関係性」の4因子であった ■祖母性の4因子は、孫誕生による祖母の気持ち、誕生後の祖母の生活の変化と関連があった ■「食事のしたくを手伝う」「孫におもちゃや洋服を買ってあげる」「おむつ交換をする」「孫の食事を介助する」「孫の遊び相手になる」「孫の服をする」では半数以上の祖母が支援を行っていた。祖母性の4因子とは相関はみられなかった
	11	祖母力を活用した育児支援のあり方の検討 久保ら（2011）	育児支援をする祖母らのQOLの向上を目指して、祖母力を活用した育児支援（孫育児支援）を普及していくための示唆を得る	横断研究	東京都内、近郊に住む孫を持つ女性298名	■平均年齢は64.4±7.2歳（49～85歳）であり、60歳代が半数を占めていた ■QOL得点は、孫が近くに住んでいる祖母が高かった ■孫が近くに住んでいる祖母は、「私の出番だ」と感じるものが多く、自分のプライベートな時間が減り、家族団らんが増加し、精神的にも身体的にも負担を感じていた ■祖母力と孫との距離では、「食事のしたくを手伝う」「洗濯を手伝う」「掃除を手伝う」「風呂掃除を手伝う」「生活費の援助をする」「おむつ交換をする」「孫の遊び相手になる」「孫の食事を介助する」「孫のしつけをする」の9項目で有意差がみられ、孫がそばに住んでいる祖母のほうが、祖母力を発揮していた
	12	孫育児に参加する祖父母が持つ孫育児支援に対するニーズ 石井ら（2011）	乳児期にある孫を持つ祖父母の孫育児支援に対するニーズを明らかにする	質的記述的研究	孫の誕生を控えたまたは1歳未満の孫育児に参加している祖父母11名	■平均年齢は59.9歳であり、50歳代7名、60歳代3名、70歳代1名であった ■孫育児に関する思いは、【孫育児を励みにする】【育児する親を気遣う】【育児する親を支える】【経験と異なる育児に戸惑う】【経験をもとに孫育児の方法を決定する】【加齢に伴う身体的・精神的負担がある】であった ■孫育児支援に対する祖父母のニーズは、【孫育児に関する情報や技術を求める】【他の祖父母の話を聞きたい】【自分のペースに合わないと感じない】【祖父母同士の交流を求めない】であった ■孫育児支援に対する反応は、【情報を基に孫育児の方法を決定する】であった

	No.	タイトル 著者（発表年）	研究目的	研究 デザイン	研究対象者	結果（主な内容）
2009 ～ 2013 年の 文献	13	乳児期にある孫をもつ祖父母に対する孫育児支援活動の実態と課題 石井（2011）	乳児期にある孫をもつ祖父母のQOL向上を実現するための孫育児支援プログラムの開発に向け、看護職者が実践している孫育児支援活動の実態と課題を明らかにする	質的記述的研究	孫育児支援活動を実践している看護職9名と管理栄養士1名の計10名	■孫育児支援活動の実態と課題は13カテゴリあり、孫育児支援活動の背景、孫育児支援活動の実態、孫育児支援活動の評価の3つに大別された ■孫育児支援活動の背景は【参加のきっかけ】【参加者のニーズ】【担当者の考え】であり、孫育児支援活動の実際は【開催の案内】【開催時期】【担当者】【プログラムの内容】【情報提供方法】【参加者数】【参加者の特性】であり、孫育児支援活動の評価は【参加者の反応】【参加者の評価】【担当者の評価】であった
	14	親世代から見た祖父母の孫育て 金丸（2013）	祖父母の孫育ての現状を明らかにするために先行研究を整理する。さらに、親子教室に在籍する親世代（母親）が捉えた祖父母の孫育てと、母親の心理的健康との関連を明らかにする	横断研究と文献レビュー	孫育てに関する先行研究CiNiを主に利用し、「祖父母」「孫育児」「孫育て」のキーワードで検索し得られた文献を整理した 親子教室での調査 2歳児親子教室に在籍した母親59名	孫育てに関する先行研究 ■対象とする文献の中では、祖父母の中でも特に祖母に焦点を当てたものがほとんどであった ■先行研究で述べられている祖父母を対象とした孫育て支援の現状は、育児情報や技術の提供が中心であった 親子教室での調査 ■祖父母の年齢は、51～55歳5.4%、56～60歳17.9%、61～65歳48.2%、66～70歳17.9%、71歳以上10.7%であった ■孫育ての頻度と内容は、月1回以上行う最も頻度が多い内容は「子育ての相談」であり、次いで「一緒に遊ぶ」「生活習慣などしつけ」の順であった ■9割以上の母親は、祖父母の孫育てに概ね満足していた。満足の理由として「適度な距離感」が最も多く、次いで「孫を預かる」「精神的支え」であった ■祖父母の年齢、支援量、居住距離と母親の心理的健康との関連では、「居住距離」と母親の育児不安の間に正の関連、「居住距離」と支援量の間に負の関連、祖父母の年齢と支援量との間に負の関連があった
2014 ～ 2018 年の 文献	15	祖母が行う育児支援に関する内容分析 粕川ら（2014）	文献検討により、祖母が行う育児支援の内容を明らかにする	文献レビュー	医中誌Webを用いて、「祖母と支援」、「祖母と子育て参加」、「実母と援助」をキーワードに、掲載誌発行年を指定せず原着論文を検索、児の年齢が生後から幼児までを対象とした祖母の育児支援内容が記述された23件	■論文の内容分析の結果、祖母の育児支援内容は、《孫の育児行為の実施》《家族生活の支援》《孫の人間性の育成》《母親への情緒的支援》《母親への情報的支援》であった ■先行研究で述べられている祖母が支援行為を向ける対象は、母親、孫だけでなく、父親やその他の家族まで及んでいた
	16	育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験 石井ら（2014）	育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験を明らかにする	質的記述的研究	育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫をもち、主な養育者である孫の親と共に、日常的に育児に参加している祖父母8名	■年齢は、祖父55.0±4.24歳、祖母59.33±5.35歳であった ■孫育児における体験は、【最初の衝撃】【希望と落胆の揺らぎ】【孫育児への寄り添い】【娘／嫁の心理的安寧の見守り】【息子／娘夫婦の家族機能支援】【自己実現】であった
	17	祖父母の子育て支援と孫の社会的スキルの発達および祖父母の精神的健康（気分状態）との関連 吉田（2014）	孫への子育て支援と孫の社会的スキルの発達および祖父母の精神的健康（気分状態）との関連について検討する	横断研究	幼稚園児170名とその祖父母170名	■祖父母の平均年齢は64.82±5.74歳であった ■祖父母による子育て支援の頻度は、ほとんど毎日21.2%、週1回以上31.8%、それ以外42.9%、ほとんどない7.1%であった ■孫の社会的スキルは、年齢があがるにつれ、社会的スキル領域の得点が高くなり、問題行動領域の得点は低下傾向にあった。男女別では、女兒のほうが社会的スキル領域の得点が高く、問題行動領域の得点が低かった ■週1回以上子育て支援を行っている祖父母（支援頻度高群）と、それ以外の祖父母（低群）との比較において、高群の男児の祖父母は活気得点有意に高かった。また、孫の社会的スキルである自己統制スキルは、全園児、特に女兒において、祖父母の支援頻度高群のほうが高いことが示された
	18	娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験 中村（2014）	娘の産後の里帰りを引き受けた体験が、実母の人生においてどのような意味があるのかを明らかにする	質的記述的研究	自然分娩した初産の娘の産後里帰りを4～6週間引き受け、その後の経過が2ヶ月以内の実母5名	■年齢は、40歳代後半1名、50歳代後半1名、60歳代前半3名であった ■実母の人生において娘の里帰りを引き受けた体験の持つ意味は、【母親としての潜在能力の発揮】【娘と孫から得られた幸福】【自己成長への気づき】【人生の新たな方向性への気づき】であった
	19	初孫を育てる中で祖父母が抱く孫の両親との役割関係の葛藤の実態 角川（2016）	初孫を育てる中で、祖父母が抱く孫の両親との役割関係の葛藤の実態について明らかにする	質的記述的研究	生後3ヶ月～6ヶ月の初孫をもつ祖父母8名	■年齢は、50歳代5名、60歳代3名であった ■祖父母が抱く孫の両親との役割関係の葛藤は、【孫の両親との関係の困難さ】【時代背景のギャップに伴う戸惑い】【育児知識や経験不足から生じる孫の育児への戸惑い】【孫の両親との関係構築への配慮】【祖父母として孫の育児に介入しすぎない関わり】であった
	20	60歳代祖母による孫の世話の状況と疲労との関連 仲野ら（2016）	60歳代祖母による就学前の孫の日常的な世話の状況の把握と疲労との関連を明らかにする	横断研究	60歳代女性732名（就学前の孫に日常的な世話あり231名、孫誕生しな501名）	■就学前の孫に日常的な世話をしている者を孫の日常的な世話あり群、孫が誕生していない者を日常的な世話なし群として分析している ■平均年齢は、孫の日常的な世話あり群63.45±2.6歳、日常的な世話なし群63.84±2.8歳であった ■世話の状況は、週の世話日数が平均3.12日であり、世話内容は、屋内遊び95.2%が最も多く、続いて食事の世話86.6%、屋外遊び75.3%の順であった ■蓄積的疲労度調査（CFSI）の8特性の各得点は、孫の世話の有無による有意な差はなかった ■孫の日常的な世話あり群のCFSIの8特性は、就業、腰痛、定期的外出、健康意識、世話の動機、育児方針の違い、世話による負担、世話をしている年数などと有意な差がみられた。中でも、腰痛、世話による負担、健康意識はすべての項目と有意な差が見られた
	21	祖父の孫育児支援行動と生きがい 片野ら（2016）	祖父の孫育児支援行動の実態と生きがいの関連性を明らかにする	横断研究	乳幼児の孫がいる祖父91名	■平均年齢は64.6±6.1歳であった ■祖父は、日常生活援助以外の「遊び」「おんぶ・だっこ」「しつけ」などの育児を中心に関わっていた ■生きがい感尺度（31～93点）の平均値は、69.9±10.9点であった。育児支援行動をしている人ほど生きがい感尺度が高かった ■「孫育児が生きがいに影響している」人は92%であり、影響している人ほど生きがい感尺度が高かった
	22	離島における1歳6ヶ月健診児をもつ保護者とその祖父母の育児負担に関する実態調査 大重ら（2016）	地域愛着、精神的自立性との関連から保護者の育児不安の特徴と要因について明らかにする	横断研究	1歳6ヶ月児健康診査の対象児の保護者138名と祖父母56名	※祖父母の分析結果のみ抽出した ■祖父母の平均年齢は、祖父62.8±7.8歳、祖母61.0±7.0歳であり、50歳代および60歳代が中心の世代であった ■祖父母は育児不安の全ての項目で、保護者よりも有意に低かった ■「今住んでいる地域が好きだ」などの地域愛着の6項目で、祖父母が保護者よりも有意に高かった ■精神的自立度は目的志向性と自己責任性からなり、目的志向性については4項目中2項目、自己責任性では4項目全てで、祖父母が保護者よりも高かった ■ソーシャルサポートと地域愛着、育児不安、目的志向性、自己責任性の関係は、無相関であった

	No.	タイトル 著者（発表年）	研究目的	研究 デザイン	研究対象者	結果（主な内容）
2014 ～ 2018 年の 文献	23	文献に見る乳幼児期の孫育てに関わる祖父母の認識と今後の課題 主濱ら（2016）	文献検討により、孫育てに関わる祖父母の認識と今後の課題について明らかにする	文献レビュー	医中誌 Web を用いて、「祖父母」「祖母」「祖父」「プレグランパ」「プレグランマ」「孫育て」「孫育て支援」をキーワードに、2010年～2016年に発表された原著論文11件	■文献によると、祖母は、孫に対して健やかに育つために出来る限りの支援をしたい、子ども夫婦世代の期待する役割に添いたいと認識していた ■文献を精査した結果、祖母が孫育てに関わることは、祖母の生涯発達に良い影響を与えることも多い反面、負担に感じている祖母もいることが示された ■祖父の孫育てが祖父に及ぼす影響についての研究は見当たらなかった
	24	新たに孫を迎える祖父母の支援ニーズに関する文献レビュー 磯山（2017）	文献の分析により、新たに孫を迎える祖父母の支援ニーズを明らかにする	文献レビュー	医中誌 Web を用いて2004年から10年間の論文を対象に、「孫と育児」「里帰りと実母」「祖父母と育児支援」をキーワードとして検索、両親の支援や孫の育児に関与した祖父母の意識や体験及び支援に関して記述がある28件	■新たに孫を迎える祖父母の支援ニーズとして記載されている内容は、【孫を迎える祖父母が育児にかかわることに伴う影響】【祖父母の役割】【妊娠・出産・育児を担う母親の身体・心理】【現代の育児法】であった

1. 1994～1998年の文献

1994～1998年の文献は3件であり、すべて量的研究であった。3件に共通して、祖父母の年齢は60歳代が最も多かった。主なテーマとして、祖父母が行う孫育ての内容と、祖父母の健康への影響について報告されていた。

祖父母が行う孫育ての内容については、母親が育児主体となり、祖父母は補佐的に育児に関与していることが明らかとなっていた¹⁵⁾ 16)。宮中ら¹⁷⁾ は、祖父母の世話内容について、孫の直接的な世話に関する項目を「直接的子育て」、母親の情緒的・情動的サポートに関する項目を「間接的子育て」、孫の遊びやしつけに関する項目を「社会・文化的子育て」と整理した上で、乳児期、幼児期の孫への祖父母の世話状況を明らかにしている。それによると、乳児期において、直接的子育てはおむつ交換が最も多く、社会・文化的子育てはあやす・抱くが最も多く、幼児期において、直接的子育ては衣服の着替えが最も多く、社会・文化的子育ては一緒に遊ぶが最も多かった。さらに、乳児期・幼児期ともに、間接的子育ては育児相談が最も多く行われていると記述されていた。また、祖父と祖母の世話内容の違いについては、祖母が食事の世話や風呂、昔話や本の読み聞かせといった育児に、祖父よりも多く関わっていたと報告されていた¹⁵⁾。

祖父母の健康への影響に関しては、主に精神的健康について記述されていた。宮中ら¹⁷⁾ の研究では、約9割の祖母が子育て参加の楽しさを認識していた。さらに、祖父母は孫から必要とされることによって「有用感」が高まるという報告¹⁵⁾ や、祖母自身がより多くの孫育てを実際に行っていると認識しているほうが主観的幸福感を高く有するという報告¹⁶⁾ もあった。その一方で、宮中ら¹⁷⁾ によると、約7割の祖母は、子育て参加への心配や不安を感じており、その内容は、自分の身体の疲労、自分が子育てをしていた時と子育ての仕方が異なり戸惑う、というものであった。

2. 1999～2003年の文献

1999～2003年の文献は2件あり、2件とも量的研究であった。この時期は、祖父母の健康への影響について主に記述されていた。この祖父母の健康への影響に関する新たな内容として、波川ら¹⁸⁾ によると、約7割の祖父母は、孫の出生後、孫の成長が見られるよう健康に注意するようになったという報告がされていた。また、祖母が生きがいとすることは、孫の世話が71.8%と最も多く、友人や隣人との交流、趣味や娯楽よりも多かったという報告もあった¹⁹⁾。さらに、祖母の心理的健康にプラスに影響していた因子として、子育てに疲れを感じていないこと、孫の母親と育児方針の相違がないこと、子どもの世話が好きであること、孫との遊びやしつけといった社会・文化的な子育て参加が多いことなどが明らかになっていた¹⁹⁾。

3. 2004～2008年の文献

2004～2008年の文献は2件あり、2件とも質的研究の文献であった。この時期における新たなテーマとして、祖父母を対象とした支援についての研究が挙げられる。石井ら²⁰⁾ は、家族員の育児対処能力の向上と良好な家族関係を目指した孫育児支援プログラムを考案・試行し、保健師や助産師などの専門職による情報提供や、参加者同士の情報交換が有用であったと述べている。

また、これまでの研究と共通したテーマとして、久保ら²¹⁾ の研究では、祖父母が行う孫育ての内容、祖父母の健康への影響について記述されていた。祖父母が行う孫育ての内容については、宮中ら¹⁷⁾ の研究結果でも示されたように、祖母が孫の成長に合わせて育児全般において支援していたという報告がされていた²¹⁾。祖父母の健康への影響では、祖母が育児支援を重荷と感じていることが明らかになっていた²¹⁾。

4. 2009～2013年の文献

2009～2013年の文献は7件あり、量的研究4件、質的研究2件、量的研究と文献レビューを合わせて報告したもの1件であった。祖父母の年齢について記述のある文献を整理すると、40～80歳代と年齢の幅は広いものの、特に50～60歳代が多い傾向にあった。この時期以前の文献と共通して、祖父母が行う孫育ての内容、祖父母の健康への影響、祖父母を対象とした支援について報告されていた。

まず、祖父母が行う孫育ての内容である。これまで祖父母を研究対象として実施した研究報告はあったものの、金丸²⁸⁾は、孫の親から見た祖父母の世話について報告しており、新たな視点で捉えていたといえる。結果、頻度の多い内容は「子育ての相談」「一緒に遊ぶ」「生活習慣などのしつけ」であると孫の親は認識しており²⁸⁾、新たな世話内容の記述はなかった。また、孫との居住距離と支援量の関連について、久保ら²⁵⁾の研究によると、孫がそばに住んでいる祖父母のほうが、「食事のしつてを手伝う」「洗濯を手伝う」「掃除を手伝う」「風呂掃除を手伝う」「生活費の援助をする」「おむつ交換をする」「孫の遊び相手になる」「孫の食事を介助する」「孫のしつけをする」の世話を多く行っていることが明らかになった。

祖父母の健康への影響についても報告があった。この祖父母の健康への影響に関する新たな内容として、笹田ら²³⁾は、祖父母の不安や困りごとの内容に、自身のやりたいことができなくなることや時間がなくなること、孫の教育やしつけ、発育や発達などがあることを報告していた。また、孫との居住地に近い祖母のほうが、QOLは高いものの、精神的にも身体的にも負担が大きいという報告²⁵⁾、祖父母が孫育児に参加する思いとして、加齢に伴う身体的・精神的負担を感じているという報告²⁶⁾があった。孫との居住距離や祖父母自身の加齢が、孫育てをしている祖父母の身体的健康と精神的健康に影響を与えるということは新たな視点といえる。

祖父母を対象とした支援に関する新たな視点は、祖父母、母親のニーズについての報告である。まず祖父母のニーズに関する石井ら²⁶⁾の報告によると、祖父母は孫育児に関する情報や技術を求めていることや、他の祖父母の話を聞きたいといったニーズを持っていた。一方で、祖父母の中には、自分のペースに合わないに参加しないという考えや、祖父母同士の交流を求めないという認識もあり、支援の必要性を感じていない祖父母もいることが明らかになっていた²⁶⁾。母親のニーズを明らかにした角川²²⁾の研究では、52.4%の母親が祖父母学級への祖父母の参加を希望しており、母親が祖父母学級に希望する内容として「祖父母の役割」が最も多かったと報告されている。孫育て支援の現状について、金丸ら²⁸⁾は、育児情

報や技術の提供が中心となっていることを報告していた。

5. 2014～2018年の文献

2014～2018年の文献は10件あり、文献数が最も多かった。研究方法は、量的研究4件、質的研究3件、文献レビュー3件であった。祖父母の年齢の記述がある文献を整理すると、50～60歳代が中心となっていた。これまで祖父母の年代に焦点を当てた研究はなかったが、仲野ら³⁴⁾の研究でのみ、60歳代の祖母に焦点が当てられていた。この時期以前に報告された文献と共通するテーマとして、以下の3点が挙げられる。

1つ目は、祖父母が行う孫育ての内容に関する報告である。この孫育ての内容に関して、祖母が支援行為を向ける対象は母親と孫だけでなく、その他家族に及んでいるという指摘²⁹⁾は新たな視点であった。また、これまでに祖父のみを研究対象とした研究はなかったが、片野ら³⁵⁾は、祖父の孫育児支援行動について、日常生活援助以外の「遊び」「おんぶ・だっこ」「しつけ」などの育児を中心に関わっていたことを明らかにしていた。

次に、祖父母の健康への影響についてである。これまで、祖母の精神的健康への影響について、孫育てをより多く行っている祖母のほうが、主観的幸福感が高いという結果¹⁶⁾が報告されていたが、片野ら³⁵⁾は、祖父について、育児支援行動をしているほど生きがい感尺度が高いと報告しており、吉田ら³¹⁾は、男児を孫に持つ祖父母の場合において、支援頻度高群のほうが低群よりも活気得点が有意に高いと報告していた。また、仲野ら³⁴⁾は、60歳代祖母の蓄積的疲労徴候調査の8特性全てと、孫の世話による負担は有意な差が見られたと述べていた。

3つ目は、祖父母を対象とした支援についてである。磯山ら³⁸⁾は、祖父母の支援ニーズについて文献を分析した結果を報告している。それによると、祖父母は、自身が育児にかかわることに伴う影響や祖父母の役割、妊娠・出産・育児を担う母親の身体的・心理的な特徴、現代の育児法という4点について理解したいというニーズを持っていることが明らかになったと報告していた。

V. 考 察

本研究結果から、乳幼児期の孫育てについての研究が増加傾向にあり、徐々に研究は蓄積されてきていることが明らかになった。対象文献について検討したところ、祖父母が行う孫育ての内容、祖父母の健康への影響、祖父母を対象とした支援の3つに大別されたと考えられた。

孫育てを行う祖父母は、補佐的に育児に関与し、育児全般における支援を行っていたが、孫の成長に合わせて支援の内容を変化させながら対応していることが実態と

して記述されていた。さらに、祖父と祖母による世話内容の違いがあることや、孫との居住距離による世話の頻度の違いがあることなどが明らかになった。このように、祖父母の性別や孫との居住距離によって、祖父母が行う孫育ての形も様々であることが明らかになったが、人々のライフスタイルや価値観の多様化が進んでいる現代においては、他の要因も孫育ての実態に影響を及ぼしているのではないかと推測される。そのため、年代別や職業の有無など、様々な条件下で行われる孫育ての実態について明らかにすることが、今後必要ではないかと考えられた。

祖父母の健康への影響は、精神的健康と身体的健康について記述されていた。精神的健康に関して、祖父母は孫育てをすることで楽しみや幸福を感じ、より多くの孫育てを行っているという実感が主観的幸福感や生きがい感を高めていたことが報告されていた。さらに、祖母が生きがいと感じることは、孫の世話が最も多く、孫育てをすることによって、祖父母の精神的健康に良い影響をもたらしていることが明らかとなった。その反面、祖父母は孫育てに心配や不安、重荷を抱いており、精神的健康に良い影響ばかりでないことが記述されていた。心配や不安の内容には身体的疲労も挙げられたが、身体的健康への影響については、孫との居住距離の近さや祖父母の加齢に伴い、身体的負担が増すことが明らかとなっていた。このように、祖父母の精神的・身体的健康への影響は、良い面と悪い面の両方があることが示されていた。しかし、身体的健康に関して明らかにした文献は少なく、特に身体的健康への良い影響については見当たらなかったことから、今後も知見を増やす必要があるのではないかと考えられた。また、加齢に伴う身体的・精神的負担があると明らかになっていたが、乳幼児期の孫育てをしている祖父母は50～60歳代が多いものの、年齢の幅は40～80歳代と幅広いことから、祖父母の年代に着目した精神的健康・身体的健康への影響を分析し、支援を検討することが必要ではないかと考えられた。

祖父母を対象とした支援についての文献によると、保健師や助産師などの専門職による祖父母への支援方法は、孫育児支援プログラムや祖父母教室などのグループ支援が主であった。その内容は、育児情報や技術の提供、祖父母同士の交流の場の提供が中心となっており、祖父母自身が子育てをしていた時との育児方法の変化に戸惑いや不安を感じている祖父母のニーズとも一致する内容であった。しかし、祖父母自身のペースに合わないと感じる教室等に参加しないと考える祖父母もいたことから、支援を必要とする祖父母にとってどのようなサービスが活用しやすいかについて、今後探る必要があると考える。

Ⅵ. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、社会背景や子育て支援体制などの違いから孫育ての実態が異なる諸外国³⁹⁾における研究は対象とせず、日本における乳幼児期の孫育てに関して、これまでの研究の動向を整理することに焦点を当てた。孫育てに関する研究は、今後も蓄積されていくと考えられるため、日本における孫育ての研究動向を継続して探索していく必要があると考える。加えて、日本の孫育てに関する課題解決の糸口や、今後の孫育て推進に向けた有益な情報を得るためには、社会背景や子育て支援体制の異なる諸外国の取り組みを探ることも意味があると考ええる。

Ⅶ. 結 論

文献レビューの結果、乳幼児期の孫育て研究は、祖父母が行う孫育ての内容、祖父母の健康への影響、祖父母を対象とした支援の3つに分類された。祖父母の年齢は50～60歳代が多いが、年齢幅は40～80歳代と幅広い年齢の祖父母が乳幼児期の孫育てを行っている実態も明らかになったことから、今後は、祖父母の年齢別の分析やライフスタイルの影響を考慮した分析を行い、支援を検討することが必要ではないかと考えられた。また、祖父母を対象とした支援は祖父母のニーズとも一致するものであったが、祖父母自身のペースに合わないと感じる祖父母もいたことから、支援を必要とする祖父母にとってどのようなサービスが活用しやすいかについて、今後検討する必要があると考えられた。

文 献

- 1) 内閣府男女共同参画局:令和2年版男女共同参画白書(概要), http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/gaiyou/pdf/r02_gaiyou.pdf, (2020年9月閲覧)。
- 2) 尾木まり:「一時預かり事業」の意義, 児童心理, 1033, 136-140, 2016。
- 3) 厚生労働省:行動計画策定指針, <https://www.mhlw.go.jp/general/seido/koyou/jisedai/kaisei/kaisei-houshin.html>, (2020年9月閲覧)。
- 4) 内閣府:一億総活躍社会の実現に向けて緊急に実施すべき対策ー成長と分配の好循環の形成に向けてー, https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ichiokusoukatsuyaku/kinkyu_taisaku/hontai.pdf, (2020年9月閲覧)。
- 5) 安藤 究:祖父母であること:戦後日本の人口・家族変動のなかで, 197-227, 一般財団法人名古屋大学出版会, 2017。
- 6) 舟島なをみ, 望月美千代:看護のための人間発達学, 84-119, 医学書院, 2017。
- 7) 内閣府:平成25年度「家族と地域における子育てに関する

- 意識調査」, <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/pdf/2-2.pdf>, (2020年9月閲覧).
- 8) 小野寺理佳:別居祖母にみる祖親性:グランドペアレンティンク教育の現実的基盤に関わらせて, 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 95, 119-141, 2004.
- 9) 喬楚薇, 松田ひとみ:高齢者の主観的健康観と幸福感 うつに関連する要因および孫の世話との関係のシステムティックレビュー, 高齢者ケアリング学研究会誌, 7(2), 1-10, 2017.
- 10) 安藤 究:祖父母であること:戦後日本の人口・家族変動のなかで, 110-137, 一般財団法人名古屋大学出版会, 2017.
- 11) 福島県教育委員会:幼児教育実態調査【祖父母編】, https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gimu/youji_d/fil/081.pdf, (2020年11月閲覧).
- 12) 茨城県教育委員会:茨城県就学前教育・家庭教育実態調査結果報告書【祖父母編】, <https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/welcome/keikaku/syugakuzen/6sohubo.pdf>, (2020年11月閲覧).
- 13) 南 博文, やまだようこ:老いることの意味-中年・老年期, 41-80, 金子書房, 1995.
- 14) 内閣府:平成25年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査, <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/gaiyo/index.html>, (2020年11月閲覧).
- 15) 杉井潤子, 泊 祐子, 堀 智晴他:祖父母・孫関係に関する研究-第3報-「孫育て」にみる祖父母の位置づけおよびその主観的評価-, 大阪市立大学生生活科学部紀要, 42, 141-153, 1994.
- 16) 杉井潤子, 堀 智晴, 泊 祐子他:祖母の「孫育て」に関する研究-主観的幸福感との関連において-, 家族関係学, 15, 89-102, 1996.
- 17) 宮中文子, 松岡知子, 岩脇陽子他:祖母の子育て参加の実態について, 小児保健研究, 55(1), 82-87, 1996.
- 18) 波川京子, 田中妙:孫の出生にともなう祖父母の育児関与と健康づくり, 日本看護学会論文集:地域看護, 30, 65-67, 2000.
- 19) 宮中文子:中高年女性(祖母)の子育て参加と心理的健康との関連について-心の健康にプラスとなる孫との関わり方, 女性心身医学, 6(2), 173-180, 2001.
- 20) 石井邦子, 井出成美, 佐藤紀子:家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題, 千葉看護学会会誌, 14(1), 107-114, 2008.
- 21) 久保恭子, 刀根洋子, 及川裕子他:わが国における祖母の育児支援-祖母性と祖母力-, 母性衛生, 49(2), 303-311, 2008.
- 22) 角川志穂:子育て支援に向けた祖父母学級導入の検討, 母性衛生, 50(2), 300-309, 2009.
- 23) 笹田ひとみ, 伊田早苗, 森本桂他:孫育てに関する祖父母の思い, 奈良県母性衛生学会雑誌, 23, 18-21, 2010.
- 24) 久保恭子, 及川裕子, 刀根洋子:祖母性の因子構造, 母性衛生, 21(4), 601-608, 2011.
- 25) 久保恭子, 田村 毅:祖母力を活用した育児支援のあり方の検討, 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 62(2), 257-261, 2011.
- 26) 石井邦子, 井出成美, 佐藤紀子他:孫育児に参加する祖父母が持つ孫育児支援に対するニーズ, 千葉看護学会会誌, 16(2), 27-34, 2011.
- 27) 石井邦子:乳児期にある孫をもつ祖父母に対する孫育児支援活動の実態と課題, 母性衛生, 52(2), 311-318, 2011.
- 28) 金丸智美:親世代から見た祖父母の孫育て, 家庭教育研究所紀要, 35, 47-57, 2013.
- 29) 粕川理恵, 桐生育恵, 山田淳子他:祖母が行う育児支援に関する内容分析, 群馬保健学紀要, 34, 23-31, 2013.
- 30) 石井邦子, 荒木暁子, 小池幸子他:育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験, 千葉看護学会会誌, 20(1), 3-10, 2014.
- 31) 吉田亜矢:祖父母の子育て支援と孫の社会的スキルの発達および祖父母の精神的健康(気分状態)との関連, 比較文化研究, 113, 263-272, 2014.
- 32) 中村敦子:娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験, 日本助産学会誌, 28(2), 239-249, 2014.
- 33) 角川志穂:初孫を育てる中で祖父母が抱く孫の両親との役割関係の葛藤の実態, 母性衛生, 56(4), 531-538, 2016.
- 34) 仲野宏子, 長弘千恵, 猪狩明日香他:60歳代祖母による孫の世話の状況と疲労との関連, 日本地域看護学会誌, 19(1), 14-23, 2016.
- 35) 片野有美子, 田中和子:祖父の孫育児支援行動と生きがい, 北海道母性衛生学会誌, 45, 39-41, 2016.
- 36) 大重育美, 顧 艶紅, 石垣恭子他:離島における1歳6ヵ月健診児をもつ保護者とその祖父母の育児不安に関する実態調査, 小児保健研究, 75(5), 594-601, 2016.
- 37) 主濱治子, 柴田文子, 山崎道子:文献に見る乳幼児期の孫育てに関わる祖父母の認識と今後の課題, 松蔭大学看護学部紀要, 2, 99-106, 2016.
- 38) 磯山あけみ:新たに孫を迎える祖父母の支援ニーズに関する文献レビュー, 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 8(1), 13-18, 2017.
- 39) 安藤 究:祖父母であること:戦後日本の人口・家族変動のなかで, 70, 一般財団法人名古屋大学出版会, 2017.